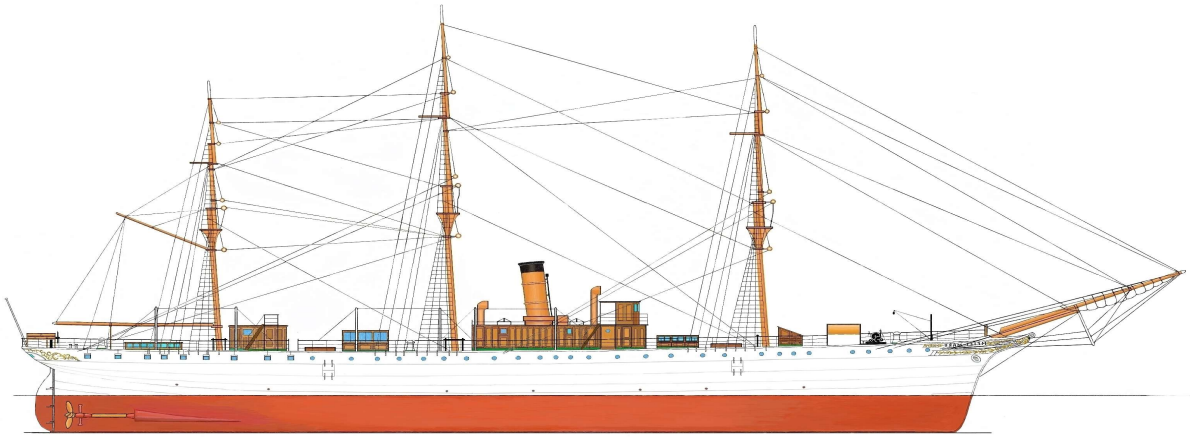
Ocean

海洋塾機関誌第10号



平成30年9月1日

特定非営利活動法人　日本海洋塾

日本海洋塾は、世界を結ぶ海と船を、広く皆様に伝える活動により、海洋立国意識の拡充を目指しています。

§高齢者の老化現象に対峙する§　　正会員　北澤昌永

「老いは死よりもさらにおぞましく感じられる」とシモーヌ・ド・ボーヴォワールは自著の「老い」の中で述懐している。

この老化現象について具体例を挙げているのはジョナサン・スイフトである。
「頑固で気難しく、貪欲で、不機嫌で、愚痴っぽく、おしゃべりになる。それだけではなく対人関係がぎくしゃくしだし、人間本来の温かい愛情が分らなくなる」と

その上、一般に暇つぶしの生きがいとしているボランテイア活動の中でも何らかの役職に就く事や、肩書を欲しがり,その虚名を振り回し。誇示したがる例が見られる。

本来、社会奉仕活動は如何にあるべきかを真摯に考える必要がある。

死に向かう肉体的衰弱を示す老化は精神面においても機能低下を伴う、と考えられている。　急速な高齢化社会にある現今、暗い未來のみを描いている論調がかなり多い。

ところが、イタリアの女性神経学者リータ・レーヴィ・モンタルチーニ（Rita levi Montalcini)は「老後も進化する脳」と題する論文を発表している。そこで「老化現象はホモサピエンスの精神活動を左右する脳にはそれほど影響を与えない」と指摘している。人間が６０～７０歳を超すと毎日１０万単位で脳細胞を失うが、人間の持っている神経細胞の数は千億単位なので消失は左程の数ではないという。
「それに脳機関内のニューロンは加齢に於いてその一部を失うが、生き残った細胞は樹状突起を増加させ、脳神経を増強させることが出来る」　「この働きがホモサピエンスの老齢期において衰えず、質的に維持される。そして精神活動は老年期、そして人生最後の時期において全く新しい能力を発揮し得る分野なのだ」と。

彼女は１９８６年にノーベル生理学、医学賞を受賞しており、いまなお百歳を超す高齢ながら研究に励んでいる。

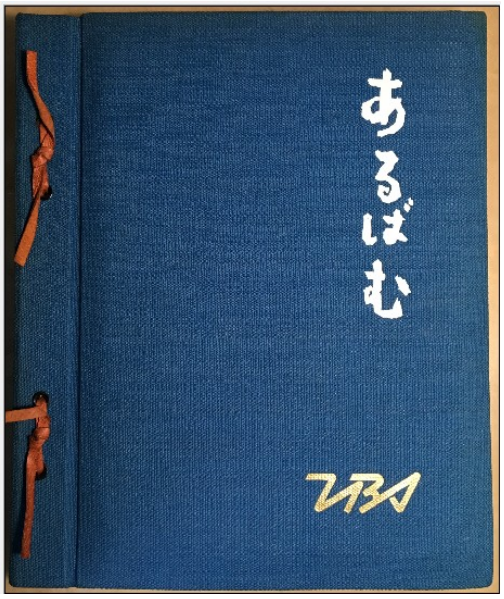
以上の論説は高齢老人にとって誠に有難い朗報のように思える。
然しながら、一般人が素直に喜べないのはボーヴァアールが嘆いているような事象がひろく認識され、スイフトが挙げているような事例が周囲に満ち満ちているからである。

すでに、高齢域に達した者には手遅れであろうが、対応策としては若年の頃から知的活動や、思考力を駆使する習慣が必要である、と結論ずけられている。

§「富士山」初登頂　の想いで§

正会員　松﨑　光男

行方不明になっていた「**あるばむ**」が見付かった。確かにあった筈の場所を何回探しても見付からなかったのに、正に探していたその場所からでてきた。家族の誰かが秘かに戻したとは考えられず、小生の探し方の問題だったのだろうか、不思議だ。



小生が東船大 2 年生の頃、「音楽部」と称し、普段練習はしないが、必要な時にのみ、口コミで集まる集団（要するに歌いたい人の集まり）が寮内に存在した。

確か「ここにも歌がある」と云う、赤坂の TBS テレビの音楽番組で、「海」に関係する歌を主題にした時があり、「海」繋がりで、その「音楽部」に寮歌を歌う機会が巡ってきた。　約 20 名が制服に身を固め、夕方、赤坂に赴き寮歌（曲は忘れた）数曲を歌った。　一緒に「ボニージャックス」が、「椰子の実」などの「海」に関する歌を歌い、番組の録画が終了した。この「**あるばむ**」は、その時に出演料替わりに、記念として貰ったものである。

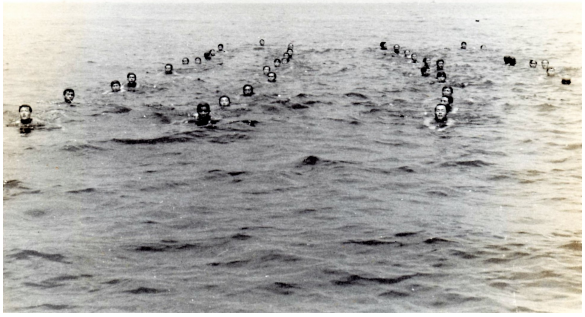
そんなこともあり、この「**あるばむ**」には、東京商船大学に入学した時から 2 年生までの写真が貼ってあり、見ていると、大学時代の想いでが、蘇ってきた。

最初のページは、未だクラスメートの名前もハッキリとは憶えていない入学直後の 13 回生航海科 2 クラスの集合写真で、2～3 人を除いて高校時代の学生服を着て写っている。「**あるばむ**」をめくっていると、台紙の間から一枚の「メモ用紙」が落ちた。　「日本交通公社」（現 JTB）の名前が印刷された、電話の脇に置いてあるような「メモ用紙」である。

「メモ用紙」には、裏表に、今も変わらない稚拙な鉛筆書きで、同じクラスの A 君と F 君の三人で「富士山」に登った時の、打合せの内容が書かれていた。

「富士山」には、高校生の夏休みに、学校が募集した登頂行に参加して行く機会があったが、台風の来襲で中止となり、それ以来、行きたいと思っていたところ、親しくなったＡ君、Ｆ 君と「富士山」のことを話すうちに、夏休みに行こう！と云うことになった次第で、水泳訓練が終わって一息入れた、8 月 1～3 日に行くことに決まった。　全員が初登頂である。

我々13 回生は、清水（1,2 年生）、東京（3,4 年生）に別れていた大学が、1960 年の夏休みに東京・越中島に統合された後の、最初の東京入学生であり、1 年生の時に、第 1 回「学生祭」(Neptune Festival) が開催され、品川プリンスホテルでダンスパーティーを開催したり、水泳訓練の場所も従来の清水から千葉の館山になる等、何もかも新しいことだらけであったとは、後になって気付いた次第。



（夏休み前、館山での水泳訓練風景）

余りに稚拙な文字であり、恥ずかしくて「メモ用紙」を映像ではお見せできないが、判読できる限り、打合せ内容として、概ね次のようなことが記されていた。

日程　8/1～3

行程　8/1　御殿場線「御殿場」→（バス）→　須走口５合目　→（登山）→　7 合目（泊）

8/2　早朝に登頂（ご来光）→　お鉢廻り　→　下山　→　須走口　→（バス）→　河口湖（泊）

8/3　河口湖（遊び）→　「河口湖駅」→　「大月」経由　帰京

食料　8/1　昼、夜、持参

8/2　朝（クラッカー　粉ジュース）　昼（パン、缶詰）

夜（ｱﾙﾌｧ米、缶詰、粉しるこ）

8/3　朝　8/2 朝と同じ　昼（ｱﾙﾌｧ米、缶詰）

調達品　ジャム２缶（￥120)、クラッカー（￥60)、缶詰（５個￥200)、ｱﾙﾌｧ米　ウイスキー、粉しるこ、　固形燃料、　（食費￥650～700）

携行品　セーター、靴下、シャツ、タオル、雨具、頭痛薬、新聞紙、ビニール　飯盒、水筒、懐中電灯、磁石、ローソク、マッチ、缶切り、ナイフ、コップ、皿、「**武器**」

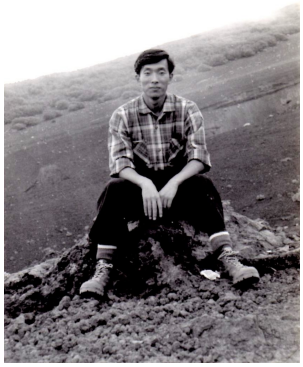
「**武器**」とは物騒であるが、言わずと知れた、スプーン、フォーク等のことで、全寮生活の中で覚えたばかりの呼び名を、メモに粋がって書いたものと思う。

「メモ用紙」には、7/29　13 時に「御徒町」に集合とあり、「アメ横」で米軍払下げの水筒、飯盒、固形燃料、その他食料品等を調達した記憶がある。

色々ある登山道のうちから、相談して「須走口」を選んだのは、出発点の 5 合目は標高 1900m であるが、このルートは混んでいないこと（8 合目で吉田口ルートと合流する）、途中６合目より少し上まで涼しい灌木の林の中を歩けること、帰りには勇壮な「砂走り」が楽しめること、等であったと記憶する。

（現在の登山ルート）

初日（8/1）は天候にも恵まれて順調に登山し、少し早目に予定どおりの、吉田口との合流地点の少し下、7 合目の山小屋に到着、生まれて初めての山小屋泊まりとなった。



翌日（8/2）は、早朝暗いうちに登山開始、頂上で雲海から昇るご来光を仰ぐ予定であったが、九州方面に近づいてきた台風の影響を受けてか、夜中から激しい雨となり、併せて強風が吹き荒れる厳しい天気となってしまった。　ここまで来て、帰る訳にはいかないので、明るくなってから雨具を身に着け登頂を開始した。

雨は強風に乗って下から上に向かって吹き上げてき、登山道の小さい軽石が強風で飛んでくる中、漸く頂上に到達した。　各自用意した雨具は、完全なものではなく、頂上に着くころには、首筋から入り込む雨水などで、結構濡れてしまった。　気温は零度、寒かった。

須走口、吉田口合流後の登山道

（現在の山頂地図　青〇が　旧「富士山測候所」）

ご存知のように、富士山頂の噴火口には、噴火口の縁を形成する尾根に顕著な頂きが八つあり、「八紳峰」或いは「富士八峰」、「八葉」と総称し、古くは仏教関係の名前が付いていたが、神仏分離令により、多くは「明治丸」の建造年である、明治 7 年に改称された。

剣ヶ峰（3776 m）、白山岳（釈迦ヶ岳）（3756）、久須志岳（薬師ヶ岳）（3725）、
大日岳（朝日岳）（3725）、伊豆岳（観音岳、阿弥陀岳）（3749）、成就岳（勢至ヶ岳、経ヶ岳）（3733）、駒ケ岳（浅間ヶ岳）（3722）、三島岳（文殊ヶ岳）（3734）

の八峰である。

着いたところ、「久須志岳（別名薬師ケ岳）」に祀られている「久須志神社」に無事登頂のお礼参りをし、強風により小石と共に横殴りに降る雨の中、噴火口底（大内院と称する）（3537m）の縁を一周する、所謂、「お鉢廻り」に出発（時計回りに）した。

噴火口の縁は、折からの横殴りの強風と雨で歩くのが危険なほどで、火口側の大岩の間を、風の強弱に合せて、飛んでくる小さい軽石を避けるように小走りで移動する、ゲリラ戦のような格好で、お互いに声掛けしながら進み、漸く「剣が峰」の「富士山測候所」に到達した。

当時は、気象観測レーダーは設置されておらず（設置完了、運用開始は 1965 年 3 月）木造の山小屋のような建物であった。 我々は、測候所の中に入れてもらい暫く所員と歓談し、測候所の看板を外して手に持って、夫々記念写真を撮った（今考えれば、ずうずうしい話であるが、商船大の学生の初登頂と云うことで大目にみてくれたものと思う）。

（頂上到着時、久須志神社内）

（測候所の看板と）

（平成 16 年の測候所の看板）

ネットで調べてみたら、小生が保持している看板は、上の写真のように、平成 16 年に測候所に掲げられていた看板と同じものだったので、感慨一入である。

因みに、「富士山測候所」は、人工衛星による観測や、長野、静岡レーダーの運用開始に伴い、平成 11 年（1999 年）にレーダーを廃止してその後レーダードームを撤去、平成 16 年（2004 年）には、職員の常駐を終了、無人化された。

測候所に別れを告げ、強風と雨の中、再び大岩伝いに火口内にあった山小屋（休憩所）に辿り着き、昼食を摂って休憩の後、下山を開始した。下山を開始した午後 2 時頃には、天候が急速に回復し、青空の下、遥か下界の一点から雲が吹き上がって、徐々にラッパ先のように広がる様を見て感動した。

須走口の下りは、7 合目から文字どおりの「砂走り」で、積もった小さい軽石混じりの火山灰（砂よりはずーっと荒い）の急斜面を、登山靴をスキー代わりにして走るように下りるので、一歩踏み出すと 2～3 ﾒｰﾀｰを稼げる。スピードをコントロール出来ないと危険であるが、楽しかった。

無事、須走口に戻り、バスで「河口湖」に向かった。「河口湖」で泊まる予定であったが、今と違ってネットで予約と云う訳ではなく、行き当たりばったり、着いてから泊まる場所を探した。夏とは言え夕方 7 時頃はもう暗く、ようやく湖畔に「バンガロー？」を見付けて荷を解いた。　「バンガロー」とは名ばかりで、中は汚くて湿っぽく、得体のしれない虫も居たが、疲れもあり、夕ご飯を食べて寝た。

翌朝、起きてみてビックリ。　良くもこんな所を宿泊施設として貸したな！と云うような「掘っ立て小屋」であった。　今になって思うと、若さと云うものは貴重なものだと、つくづく思うが、「まぁ、しょうがないか」と諦めて、朝ご飯を済ませて、湖畔を散策した。

館山での水泳訓練を終えたばかりで、水泳に自信もついたところであったので、泳ごう！と云うことになり、冷たい湖で泳いだ。湖底には沢山の藻が生えており、足を捕られそうになったが、楽しかった。

（泊まったバンガロー　A 君と）

その後、富士山には3回登った。最初は、1968年の夏であった。
「海王丸」での遠洋航海で寄港した、カウアイ島のポートアレンで友達になった日系女性（当時高校生）が、ハワイ大学に進学し、大学のプログラムに参加して、夏休みに来日した。
2週間程度の滞在中、東京を案内し、我が家にも招待したが、「雪」に触ったことが無いことが分かったので、「雪」に触らせてあげようと思い、富士山頂の残雪を思い出し、小生の妹、甥っ子2名を伴って、経験のある「須走口」から登頂した。小生以外は未経験者であった。

（このハワイの女性は、現在はホノルル在住で、その後もこちらがホノルルを訪ねたり、先方が東京に来たりと、今でも家族ぐるみの交流が続いている）
この登頂で、小生の妹が「富士山」登頂を好きになり、甥っ子2名と共に再度挑戦した。
最後は、香港の野球の「リトルリーグ」で、小生が監督をしたチームの、チームメイトだった家族を案内？して、1982年の夏に、女房を連れて二家族で登った。頑張っても、子供達にドンドン先に行かれ、この時ばかりは中年の悲哀を感じた。
総て、勝手知ったる、「須走口」からの登頂である。

初登頂から早や57年。既にF君は鬼籍に入った。
雄大な「富士山」は、いつ見ても心に残る。大好きな山である。
今でも、時間を掛ければ登れるとは思うが、「年寄りの冷や水」と云われないように自重している。

以上

§明治期の船舶登録、積量測度制度の変遷 （明治丸は太っていない）§

正会員　都築雅彦

「明治丸」の要目寸法が、巡廻船時代と練習船時代で違っていることは、以前より指摘されていたが、これを解明しようと思い、公的登録を記録している「ロイズレジスターブック」（以下、L・R）と「日本船名録」（以下、船名録）によって要目記録を追い、これに当時の登録、積量測度、検査制度などの制度と整合させ、実状を調べてみた。

現在、閲覧できる「L・R」は、1876-77 年（明治 9-10）版からのものが「海事図書館」にあり、「船名録」の方は、海事図書館に明治 30 年版からが収蔵されているが、「国立国会図書館デジタルコレクション」で明治 20 年版から閲覧できる。
また、当時の制度の変遷などは、海洋大学図書館に参考書類が収蔵されている。

１、明治初期の状況

維新後の騒動続きのなかで、航洋船の管船制度をどうすればいいか迷った政府は、とりあえず登録と徴税の制度を制定し、要目を決めることは、西欧の要目を認定することで時間を稼いだ。

これを「明治丸」について見ると、ロイズの竣工検査証書にある登録用の
＜長｜幅｜深／総噸｜登簿噸＞　＜ 240.3｜29.4｜21.7 (ft)／ 1010.08｜463.24 (ton) ＞ は、
「L・R・明治 9 年版」に登録されており、これが当時の公的登録された要目である。

日本では、明治 12 年・内務省布告で、登録制度として「西洋型商船登簿船免状」（国籍証書の元になる）書式を制定、「L・R」並みの要件を記載した証書を制度化した。
これに記載する要目寸法は、「量噸甲板上最大ノ長サ｜内法リ最大ノ幅｜艙室に於テ量噸甲板ヨリ船底中央ノ内板ニ至ル深サ」 とされ、噸数は、造船国が認定した総噸、控除噸、登簿噸などを登録、これらは後年発刊される「船名録」にも記載された。
（船名録の発刊は、所管庁の変更が重なり大幅に遅れた）

日本船名録の初版と思われる明治 18 年 12 月現在の登録船を纏めた「船名録・明治 20 年版」には、「明治丸」要目が、上記の「L・R」数字が記載されており、これが明治 25 年まで続いている。

２、明治中期

明治 17-18 年になると、容積噸の算定のため、英国式のモールソン方式で算定する方式を取り入れた「船舶積量測度規程」が制定され、加えて検査体制も整備されことで管船制度の基礎が固まった。　・・・（検査の時に小うるさい「JG さん」の始まり ）・・・
ただしこの規程では、寸法単位を尺寸分、100 立方尺を 1 噸としたため（以下、和式要目）、ロイズ要目を使ってきた日本船は、寸法が大きな数字になり、噸数も凡そ 1.7%大きくなり、トン税、灯台税、港湾料金などが増額となり、混乱がはじまった。

この制度の成立で、明治 18 年、ロイズは横浜と神戸に日本事務所を開設、英国政府も日本の規則を承認することとなり、「L・R」に日本規程による尺寸分の数字が載ることとなった。
（ この頃の日本籍船は、時間を稼いで何年もかかって登録要目の書換えを行っている ）
「明治丸」は、「船名録・明治 26 年版」でやっと和式要目に修正され、単位の記載をしないで、

＜242.00｜29.25｜21.50- 1027.57｜448.7＞に変わっている。
　この数字は「航路標識管理所第一年報」に記載されている数字と同じで、1ft を 1.0058 尺、100 立方 ft 噸×1.017 で 100 立方尺噸に換算したと思われ、「第一年報」では尺寸分の単位が付されている。
この時期はボイラー交換などの改装工事を実施しているので、検査を受けているはずで、幅と深さの違いは計測場所の違いと思われる。
　このころから国際的に船体構造の改良、船型の大型化が進み、それに合わせて容積噸の定義の変更などが続いており、法制や検査の現場はかなり混乱があったと思われる。

　この後日本では、明治 28 年「造船規程」を制定し、船体構造、工事規則などが規程され、「造船奨励法」「航海奨励法」も制定して、海国日本を目指して進み始めた。
「造船規程」では、ロイズ船級規則に合わせて寸法単位を呎吋に決めており、練習帆船「大成丸」の要目には、造船規程による寸法と注記している場合もある。
このため、「登録証書」には尺寸分、呎吋の寸法と、和式噸が混在することとなった。

３、明治後期

　明治 28 年から 33 年までの「船名録」では、「明治丸」の総噸数が 1037.2 噸になっているが、総噸算入区画や控除区画を取り違えた模様で、「船名録・明治 35 年版」では 1028 噸に戻されており、以後大正 5 年まで汽船として掲載され、大正 6 年の船名録以後に削除されている。
これは、来襲した台風で岸に乗揚げ、大破し、船としての耐航性がなくなったためと思われる。

４、その後

　和式要目と測度はまずいとして、大正 3 年の改正で、フィート、100 立方フィート噸に修正されたことで、日本船社はほっとしたと思われるが、「明治丸」はその前に「船名録」から削除された。

５、まとめ

　以上から、「明治丸」の要目違いは、竣工以来の寸法をフィート数字と尺寸分数字で表したため、混乱した結果で、これに、切り捨て、四捨五入が加わったためと思われる。
文化財指定の際、建造時の造船、管船制度なども調査すべきだったと思われる。

参考 ： 船体寸法と積量測度

1、船体寸法に、造船用、登録用、運用上の種別があることは、船に関わる人には当然のことと思われるが、明治 12 年布告の「西洋型商船登簿船免状」では、長さは「量噸甲板上最大ノ長サ」、幅は「内法リ最大ノ幅」、深さは「艙室に於テ量噸甲板ヨリ船底中央ノ内板ニ至ル深サ」 と定義された。 しかしながら、幅については、フレームの内側？ 内張板の内側？ など、深さについては、船底内張？ 肋板の上面？ 竜骨の上面？ など 計測位置が明確でなく、現場はどこを測ればいいか混乱したと思われる。
「明治丸」のように、バーキールの上に船底肋板を組み、その上にキールソンを組上げた構造では底はいろいろあって、同船の Midship Section によれば、船底肋板上に内張り板が甲板状に敷詰めてあるので、上甲板梁上面から船底内張り板上面までが登簿深さになる。

また、幅は型幅（肋骨外側の幅）から肋骨と内張り板の厚さを、差し引いて、内法幅が登簿幅になっている。
明治 29 年に「登簿船免状規則（改正）」が出されたが、当初の定義は引き継いだ規程になっており、同年に制定された「造船規程」では、造船寸法（造船長さ、-同-幅、-同-深さ）が規程され、混乱度合を深めた。
このため、明治 32 年に施行の「船舶法」では国籍証書の交付申請に当たり、登簿船免状規則、造船規則、積量測度規則などの各規程による要目を、尺寸分、呎吋、の寸法で登録することとなり、申請書には各種の寸法が並ぶことになった。

2、容積噸（総噸、純噸）の算定は、英国で 1854 年に採用されたモールソン方式による算定方式が標準的になり、甲板下と甲板上施設の噸数を合わせて総噸数とし、ここから機関室、乗組員常用室の噸数を控除したものを登簿噸数（純噸数）として、登簿噸を課税対象としていた。
このため、登簿噸を少なくすることに造船所、船主は知恵を絞った。 その手段として、総噸数に算入しない甲板構造物（デッキへの出入り口、甲板上の便所、など）と、総噸数から削除する区画（船員常用室、機関室、甲板長倉庫、帆庫など）を設定することで、為政者と合意していた。
　このころ西欧では、船体構造の改良（軽甲板船、遮浪甲板船、二重底の開発など）や、船型の大型化、などから、噸数不算入の区画、総噸から控除する区画などが、相次いで現れ、基準がころころ変わる事態になっていた。
　日本も、明治 17 年の「船舶積量測度規則」を制定し、西欧並みの算定方式を取り入れたが、測度単位に尺寸分、噸数単位に１００立方尺を１噸としたため、混乱のおまけとなった。
同規則の細則規程には、モールソン式とシンプソン計算式が漢字と片仮名で書かれており、
読んで理解できるような条文ではなく、現場は解読に大変だったと思われる。

　「明治丸」の検査証書によれば、
甲板下 998.75 噸プラス上甲板室 11.33 噸で、総噸数は 1010.08 噸、内訳は、機関室 472.89 噸、乗組員室 73.95 噸、登簿噸 463.24 噸　となっているが、明治 22 年頃から船名録にいろいろな数字が出てきており、どれが本当か？的な変わり方になっており、お手上げした。

　以上、解明にかなり苦労したが、経緯が理解できたことが収穫で、かねてから気になっていた「明治丸」が太ったのは、「メジャーが違っていたため」と分かり落ち着いた次第である。

§天草へ　（２０１１年）『長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産』
２０１８年７月、世界文化遺産に登録された§

正会員　小島　茂

六月十六日夕、九州に活発な梅雨前線がかかり、熊本空港も雨だった。天草五橋の四番目、前島橋を渡ってすぐ左、「ろまん館」に泊る。風呂の湯はしょっぱい。国道の反対側にホテル「竜宮」、途中の大矢野島には旅館「亀屋」もあった。

翌十七日、朝、夜半からの激しい雨は止む。

午前中、三学年あわせて三十五人の阿村中学へ、午後は三百人の大矢野中学に廻る。体育館で、「船長、母校へ帰る。海と船」の話をした。

天草には江戸時代末から船主が多く、また外航航路の船員も、長崎の島原半島同様、明治中期より増加しところである。現在は少なくなり、一人でも「海」、「船」に関心を持ってくれたらと願いながら、学校を後にした。

現在、大矢野中学校の建っている場所は、大矢野城があった跡地という。天草四郎はこの島で生まれ、洗礼を受ける。幼くして読み書きができ、神童といわれた。彼は、天草の西岸より早崎瀬戸を渡り、島原半島へ。四年間続いた旱魃により、農民一揆が起こった。「島原の乱」、彼は、そのシンボル的存在となり、戦い、敗れた。十六歳だったという。原城の攻防は大変なものだったと知る。天草と島原の位置関係、キリシタン大名小西行長と、加藤清正、江戸幕府直轄領、キリシタン弾圧、隠れキリシタン等々、詳しい歴史はまったく知らなかった。

十八日、朝、また、雨が降り出す。大雨注意報が出ていた。飛行機の出発十七時まで、元商船三井の機関長、吉本さんの運転で下天草島を走る。立派な樹林を縫って、タイヤが水しぶきをあげる。激しく降っている雨で、勾配がきつい川は、滝のように濁流となって流れおちる。サンセットロードといわれる道は、最近、完通したそうだ。山中を抜け下天草西海岸「下田」に出る。八十メートルはある崖の上に一軒だけ建っている、土産物屋と食堂を兼ねた店に飛び込む。雨は激しく降り続いている。客は我々四人だけだった。

店主は、「二年前まで神奈川県の寒川に居たのですが、定年を機会に妻と話し、帰郷して店を開きました。夕陽がきれいですよ。世界で一番美し夕陽、サンセットです。魚がよく釣れます。帰ってきてよかったと思っています」と。

傘を斜めに差して、板張りのテラスに出る。風と雨が吹き上がり、顔に受ける。下の岩場の海を覗き、遠く水平線を探すも見えない。

「そうだ、ここは、去年夏、旅行で行ったポルトガル、リスボンの北、ヨーロッパ大陸の果て、霧のロカ岬だ」。

天正遣欧少年使節団、少年四人、日本を離れるとき、この天草を眺め、景色を脳裏に焼き付けたのではないだろうか。長崎を出帆し、マカオ、マラッカ、ゴア、喜望峰をまわり、リスボンに着いた。航海の日々、水平線、荒れ狂う海を見て十五、六才の彼らは望郷の念に駆られたのは確かだと思う。

お店には陶磁器が売られていた。「高浜焼き」とある。記念に軽い、薄手の丸い「一輪差し」、青と赤の小さなトンボが白磁に描かれているものを買う。説明書によると、「ここ下天草、高浜付近の山は、昔から良質の砥石を産していた。江戸中期、貧しい村民をいかに食わせるかを考え、庄屋の上田伝五右衛門はその石を砕いて磁器を焼いたらどうかと着想した。苦労を重ね、何とか独自で高温の窯で焼くことが出来、事業化した。ちなみに『瀬戸物』といわれる『瀬戸焼き』は高浜へ修業に来た陶工が、技術を持ち帰って普及させた」という。

この後、豪雨の中、さらに南に下り、大江天主堂、崎津の天主堂を訪れた。隠れキリシタンの里である。入り組んだ湾に面した河浦町、かつてキリシタンの宣教師育成学校があったと言われる場所に、天草コレジヨ館がある。案内の方が、丁寧に説明してくれる。ローマを見た少年たちが持ち帰った、印刷機、ギターのような楽器、六分儀等が展示されていた。六年ぶりに帰った四人を待っていたのは、キリスト教禁教令が出された日本だった。天草の教育委員会の刊行した『天草の歴史』に書かれている。

「千々石ミゲルは棄教」、「伊東マンショは宣教活動を続け長崎で昇天」、「原マルチノはマカオに去る」、「中浦ジュリアンはバテレンとなり潜伏、のち磔の刑、『我はローマを見たり』と叫び熾烈な殉教をした」とある。

上記の「天草の歴史」、司馬遼太郎の「街道をゆく」、（第１７巻「島原・天草の諸道」を読む。昨年読んだ「街道をゆく、南蛮へのみち」とここで繋がった。

明治になり、宗教が自由になったとき、この南天草地域には千人近くの隠れキリシタンが住んでいたといわれる。

案内してくれた、吉本さんの上天草の実家前を自動車で通った。六月なのに、玄関の上に、正月のしめ縄がまだ残っていた。不思議に思っていたところ、「天草の家では、正月の飾りは一年中残しておくしきたりなのです。『うちはキリシタンではありません』とあえて表していたのだろう」という。

十七日の、ホテル「ろまん館」での夕食について。

まず、ウニ、白身の魚と烏賊の刺身。小ぶりの近海で獲れた鯛の塩焼き、蛸のステーキ、鮑のバター焼き、サザエのつぼ焼き。

幻の魚「あら」の煮物、特産「車えび」の生と天麩羅、えびの頭の部分を塩で焼いてくれる。磯海苔の味噌汁。野菜も新鮮。飲み物は、ビールとワインを選んだ。

仲居さんは元気な方でした。食事の進め上手だった。途中、仲間の人を呼び「この人

の生まれは『姫戸』、上天草島の北の端、ここの女性は皆とても元気」と説明を受ける。「父ちゃんは、あんたらと同じ、船乗り」。天草の一揆のときは女性も槍を持って、勇敢に前線で戦ったという。なるほど天草の女性の気風のよさは、そのＤＮＡを引いているためか。「本土の人は好かんとね」、熊本の加藤清正のことか、江戸からの代官か。

十八日、昼過ぎから雨は小降りになる。遅い昼食は上天草の西浜沿い、「海老の宮川食堂・志柿店」、店の前に海老の養殖場を持っている。「宮川丼」を注文。十分ほど待つ。どんぶりに、山盛りの海老の天麩羅と、かき揚げ。　大満足。

皆さま、是非、天草へ。

§井上馨の生涯§

正会員　澤間譲治

前号に引き続き、今回は御紹介して来た長州ファイブの最期の一人、初代外務大臣にして、鹿鳴館で名を馳せた井上馨の生涯を記します。

●藩士の家に生まれる

井上馨は、天保６年（１８３５）１１月２８日、長州藩士井上五郎三郎光亨の次男として、周防国吉敷郡湯田村字高田（山口県湯田温泉）に生まれた。幼名を「勇吉」と言った。父光亨は、禄高１００石余りで、生活に余裕はあったが、質素で勤勉な生き方を尊重し、農業を営みながら暮らした。父はそのような暮らしをしながら、馨たち子供に対しては厳格な躾を行った。

●山口から萩へ

弘化２年（１８４５）１１歳の時、馨は、家から一里ばかり離れた山口講習堂に通い、国学や漢学を学んだ。同時に馬術、弓、槍、剣術などの稽古に励んだ。

１７歳の時、兄と共に萩へ行き、藩校明倫館に入った。この時二人は、部屋を借りて自炊をしながら明倫館に通った。

●藩主の警備の役に就く

安政元年（１８５４）、馨は、藩主毛利敬親の警備に加わり、翌年の９月、藩主の参勤交代に伴い、江戸へ出た。この年の１月、馨は、萩の長州藩士志道家の養子となっていた。江戸では、桜田にある長州藩邸の有備館で寝起きし、学問と武術に励んだ。又江戸三大道場である斎藤弥九郎の練兵館に通い、剣術の修行をした。この練兵館は長州藩士桂小五郎（後の木戸孝允）が塾頭として活躍した道場だった。

●蘭学を学ぶ

嘉永６年（１８５３）、アメリカ合衆国東インド艦隊のペリーが、日本に来航してから国内が騒がしくなり、諸藩の藩士たちは武術に力を入れた。そんな中、藩からの奨励もあり、馨は、外国の技術を学ぶため、江戸に滞在している肥前藩（佐賀県）の学者岩屋玄蔵に蘭学を学んだ。又砲術研究のため、江川坦庵の塾に入門した。

●藩主、世子の小姓役として

江戸で学問に励んでいたある日、馨は藩主の小姓役（世話役）に命じられた。万延元年（１８６０）３月のことであった。翌年その働きを認められ、「聞多」の名を藩主からいただいた。文久２年（１８６２）には世子（藩主の後継ぎ）定広の小姓役を任され、江戸で働く事になった。江戸に出てから馨は、多くの人々と接するようになった。

●密留学を志願する
文久２年（１８６２）１２月１２日、馨は、攘夷行動に加わった。品川の御殿山に建設中のイギリス公使館を焼き討ちすることだった。公使館に火を放った馨は、江戸を離れ、京へ向かった。
馨が京へ入ってしばらくして、長州藩士の井上勝と山尾庸三が、外国に密留学すると言う話を耳にした。馨は、いてもたってもいられず、仲立ちをする商人に、自分も密留学できるよう、藩への取り次ぎを頼んだ。間もなくして、馨も密留学を許された。
渡航費用の目途を付けると、馨たちは、文久３年（１８６３）５月１２日夜、横浜を密かに出航した。当時、幕府の者以外は外国へ行くことを禁じられていたためだった。密留学する者は、伊藤博文、遠藤謹助、山尾庸三、井上勝と最終的に５人となった。

●出航と攘夷
馨たちが横浜を出航する前日の文久３年（１８６３）５月１１日未明、下関海峡では長州藩による、外国船への攻撃が行われた。この「攘夷決行」を、５人は知っていたが、どのような結果になるか、馨たちは知る由もなかった。それよりも、これから向かう外国の事を思って、期待と不安で胸が一杯だった。
船が経由地の上海に着くと、馨は、その繁栄ぶりや港を行き交う多くの外国船を見て、今の日本が攘夷を行うことは、良くないことだと思った。馨は長州藩の要職に宛てて「攘夷は無謀であり、国を滅ぼす事になる」と手紙に書いた。この考えが決定的になるのはロンドンに着いてからだった。

●上陸したロンドンの姿に・・
馨が目にした街には３階や５階建ての高い建物が並び、汽車が走っていた。工場から出る煙は、天に届くほど高くたなびき、そして街中には多くの人々が行き交っていた。その賑やかさを初めて見た馨たちは茫然として、攘夷の考えは、頭の中から一瞬にして飛び去った。
馨たちは、世話人の案内で、ロンドン大学ユニバーシティ・カレッジのウィリアムソン教授の家に下宿することになった。

●新聞で危機を知る
英語が話せるようになると、馨は、ユニバーシティ・カレッジの聴講生となり、イギリスの文化について一生懸命に学んだ。
１８６４年１月（文久３年１２月）英字新聞に薩摩藩で起こったイギリスとの戦いや、長州藩が下関で外国船を砲撃したことが書かれていた。そして「長州藩に対して、報復をしなければならない」とも書いてあった。馨は今自分たちのいるこの文明国イギリスと戦うことは、日本にとって大変危険だと感じ、藩を説得するために伊藤博文と急いで

●帰国することを決めた。
馨たちが、ロンドンを発ったのはイギリスに来て半年も経たない１８６４年４月半ば（元治元年３月半ば）だった。専門的な技術や学問を学ぶことはできなかったが、馨にとっては、進んだ文化や技術を見たことだけで充分だった。

●イギリス船で長州へ
横浜に着いた馨と博文は、外国の艦隊が長州を攻撃する計画を知らされた。そこで馨は、公使オールコックに会わせてもらえるように頼んだ。
公使に会うと二人は、「長州へ戻り、藩主を説得して、攘夷を中止させる事」を約束した。

●藩への説得は失敗
元治元年（１８６４）６月２３日、馨たちを乗せたイギリス軍艦バロッサ号は、豊前国（大分県）の姫島近くに錨を降ろした。１２日間の期限をもらった二人は、そこから小さな船に乗り換え、長州の富海へ向かった。藩庁のある山口に着いた頃には、夜になっていた。
翌朝、御前会議が開かれた。馨は藩主たちに、自分の目で見て来たイギリスの様子を話し、攘夷は危険であることをといた。しかし外国の事情を想像出来ない藩の上役たちは、すでに藩の考え方が攘夷に決定しており、今これを変えると、藩内で混乱が起こる、と反対し、馨たちの説得は失敗に終わった。

●わずか３日間で敗北
それから１ヶ月後の８月５日、イギリス、アメリカ、オランダ、フランスの四国連合艦隊が下関海峡の砲台を攻撃開始した。戦いは、わずか３日間で終わり、長州藩は、攘夷を行う恐ろしさを、嫌と言うほど思い知らされた。
命懸けでイギリスから帰国した馨たちの苦労は、報われなかった。

●講和使節として
藩主や世子定広の命で休戦が決定し、外国に謝罪することになった。講和会議は、萩から山口に呼び出された高杉晋作が家老になりすまし、馨と伊藤博文が通訳として加わり、イギリス軍艦で行われた。
この時、外国との講和が成立したとの噂が広まり、長州藩内の攘夷派は、怒りをあらわにした。

●藩の考え方を変える
元治元年（１８６４）７月に京で長州藩が起こした蛤御門の変で、「天皇のいる御所に向けて大砲を撃った」と言う理由で、幕府から長州征伐の命令が出ていた。
９月２５日、長州藩内で藩主を交えて会議が開かれた。幕府の命令に従う俗論派と、戦力を整えてから従う正義派（武備恭順）の意見に分かれた。この時馨は、藩の一大事を救うには武備恭順しかあり得ないと主張した。結局、藩主は、武備恭順の考え方を採用した。

●袖解橋で襲われる
会議後の夜の帰り道、袖解橋近くで馨は襲われた。馨が武備恭順を叫んだことに反発した俗論派によるものだった。
この時、山口に来ていた美濃（岐阜県）の医者所郁太郎が呼ばれ、傷口を小さな畳針で縫い合わせたと言われ、その傷口は、５０針にも及んだと言われている。馨は何とか命を取り留めた。

●幕府が倒れる
それから３年後の慶応３年（１８６７）１０月１４日、幕府は、討幕の危機を避けるため、政権を天皇に返した（大政奉還）。しかし、長州藩などの討幕派は、１２月９日、王政復古の大号令により、幕府制度を廃止した。ここに２６５年続いた江戸幕府は、幕を閉じた。
翌年１月、馨は、参与の一人に命じられた。この日、旧幕府軍と新政府軍の戦いが京の鳥羽と伏見で始まった。

●九州鎮撫参謀として長崎へ
慶応４年（１８６８）１月下旬、新政府軍と旧幕府軍の戦いが続くなか、馨は、海外渡航での経験を買われ、外国事務掛となった。また、兼務で九州鎮撫総督参謀となり、幕府が逃げ出し、政府が機能しない状態になった旧幕府の直轄地である長崎へ赴いた。
馨は街で外国商人が我がもの顔で振る舞い、その外国人たちに長崎の人々が服従の態度をとっていることに腹を立てた。
「旧幕府がやったように、外国にこびれば、外国人の思い通りになる。今はまず信頼関係を作り、自分達の考えをはっきりさせて、外国と交流することが大事である」と伊藤博文に手紙で書き送った。馨は以後こうした外交姿勢を貫いた。

●孤立して、職を辞した
明治４年（１８７１）９月、３７歳の馨は、大蔵大輔となった。
岩倉使節団が外国視察へ出発し、主要人物が不在になったことで、留守番政府は、新し

い政策を次々と実行していった。
そんな中、司法卿に任命された江藤新平は、裁判所の設置などで、高額の予算を要求してきた。しかし馨が調べてみると、予算の半分しか必要のない事が分かった。馨は、先ず国内の財政を整える事を主張した。しかし政府はこれに聞く耳を持たず、馨は此れに腹を立て、明治６年（１８７３）５月、辞表を提出した。この時部下であった渋沢栄一も馨に賛同して辞職している。

●先収会社を興す
馨はこの頃、産業を興し、国を豊かにすることを考えていた。そこで、日本人や外国人に実業家に出資を頼み、会社を立ち上げた。明治６年（１８７３）暮れ、馨が３９歳の時のことである。事務所を東京の銀座４丁目の角に置き、総務を馨自身が担当し、頭取に長州から呼び寄せた幕末の豪農吉富簡一を据え、会社は出発した。社名を「先収会社」と名付け、鉱山の経営と貿易に携わる事業を行った。

●三井を倒産から救う
馨たちが携わったのは、鉱物資源の開発と米の輸出入だった。そのほか、生糸を輸出し、武器や肥料を輸入し、大きな収益を上げていた。そのような時、馨と懇意にしている豪商三井が、倒産しそうになった。当時、政府の公金を使うことができたのは、三井と小野組だった。その小野組も経営状態は悪く、渋沢栄一が総監を務める第一国立銀行にまで影響を与え、日本経済を破滅に追い込むと考えた馨は、政府に保証金の増額をすすめた。その政策は実行され、資金を用意できない小野組は倒産に追い込まれた。
一方三井も保証金を用意する事に苦労していた。そこで馨は、自分の会社を他人に任せ、三井のために奔走し、倒産の危機から救った。

●鹿鳴館の建設
政界に復帰した馨は、条約改正のために、外国に日本も同じ文明国であることを認めさせるには、法律を整え、習慣なども同じように西洋風にしなければならないと考えた。そこで、社交場鹿鳴館を造ることを提案し、明治１６年（１８８３）１１月、東京の日比谷にレンガ造りの２階建て洋館を完成させた。
鹿鳴館を利用しての外交は、明治２０年（１８８７）まで続けられた。

●初代外務大臣に就任
明治１８年（１８８５）１２月、伊東博文によって内閣制度がつくられ、博文は、初代内閣総理大臣に、馨は同じく初代外務大臣に就任した。しかしながら、外国との条約改正の交渉が行き詰まり、馨はその責任をとって、明治２０年９月辞任することになった。

●政府の後ろ盾として

その後、黒田内閣の元で農商務大臣や、伊藤内閣で内務大臣、大蔵大臣などを務めた。明治３４年（１９０１）５月、６７歳になった馨は、組閣を命じられるが、それを断り、長州出身の桂太郎にその役目を譲った。その後、政府の後ろ盾となり、常に政治の世界に大きな影響を与え続けた。

大正４年（１９１５）９月１日、病気療養中の静岡県興津の別荘で亡くなった。享年８１歳。現在西麻布の長谷寺に葬られている。

特定非営利活動法人　日本海洋塾
＜NPO　Meijimaru　Memorial　Academy＞
事務所：〒135－8533東京都江東区越中島2－1－6
東京海洋大学越中島会館2F
TEL：03-6458-5272
FAX：03-6458-5272
E-Mail：kaiyojuku5122@train.ocn.ne.jp
ホームページURL：http://kaiyou-juku.org